

麻酔科領域の雑誌と病院図書館

荻野 行正

I. 病院図書館の役割と限界

人類の知的財産である書物を中心とした情報の集積・保存と、それらを大衆に開放することが図書館の根本的使命と言えるでしょう。病院図書館においてもこの立場は変わらないと思います。ゲーテンベルク以来、情報の媒体は印刷物としての書籍が主体でしたが、20世紀の終わり頃から情報がどんどん電子化されてきました。この情報の電子化傾向は図書館のあり方にも少なからぬ影響を及ぼしていることと思います。とりわけ、英文雑誌を多く取り扱っている医学図書館においては、この情報の電子化は避けられない大きな波となって押し寄せていることでしょう。

情報の保管庫として図書館をみた場合、大学の医学図書館などは独立した建物を持っている所もありますが、ほとんどの病院図書館は病院内の一角を図書室として利用しているので、受け入れ可能な図書の数はおのずから限られてしまいます。だからこそ、信頼できる雑誌・利用される雑誌を予算の範囲内で購入し、限られたスペースに効率よく置きたいとは誰もが考えることでしょう。

II. 臨床医が雑誌を利用するのはどんなときか?

私たち臨床にたずさわる医師が雑誌を読むのは、学会発表や論文作成の準備・抄読会の準備をするとき、あるいは医学・医療の新しい動向を漠然と眺めるときなどでしょうか。前者のよ

うな形で雑誌を利用する場合、情報のターゲットはたいてい明確になっているものです。ある疾患の症例報告を調べたい・特定の治療法の治療成績を知りたい・関心をもっている研究の最新情報がほしいといった具合にです。こういう利用の仕方をする場合、最近ではインターネットを使ってデータベースを検索するという方法が主流になってきているようです。今日では、パソコンの端末からインターネットに接続すれば、世界中の情報が瞬時に得られる環境が確立されています。ですから、地方の小さな病院からでも大学病院と同等規模のデータベースを利用できるわけです。これがインターネットの最大の魅力でしょう。こうした情報化社会への対応は、病院図書館にも今後ますます求められてくることでしょう。一方、後者のような利用の仕方、つまり漠然と医学雑誌を眺めるような場合は、今すぐ知りたい情報が特別にないことが多いようです。ソファにでも腰をおろして、新着雑誌を手にとってページをただ繰っているだけかもしれません。

こうした質の異なる利用法から考えると、私たちが病院図書館に求めるものは「情報化社会への対応」と「快適空間の提供」ということになるでしょうか。どんなに大きな図書館であっても発行されている雑誌をすべて所蔵することは不可能ですし、現在のような情報化社会にあってはかえって無駄にすら思えてきます。図書室にインターネットに接続できる端末があって、データベースの検索法に慣れていない利用者を図書館員が手助けしてくださる体制が整っていれば、それで充分ではないでしょうか。

おぎの ゆきまさ：京都南病院 麻酔科医長
VYC14547@nifty.ne.jp

正直に申しますと、忙しい臨床医の中にはPubMedも満足に利用できない医師がいます。縣俊彦編著「PubMed活用マニュアル」(南江堂)などを読みながらでも検索すればよいのですが、その時間すら割けない医師にとっては、聞けば即答して下さる図書館員の方々はとても頼りになる存在なのです！ 今ひとつの利用法である冊子体としての雑誌の閲覧を考えたとき、図書室に求めたいことは「くつろいで本を読める快適な環境」の整備です。静かな雰囲気、適度な明るさ・快適な室温と湿度ばかりでなく、臨床にたずさわる医師や医療従事者が息抜きのために立ち寄れる「癒しの空間」としての図書室があれば幸せに思います。当直明けの昼休みに図書室に行って、堅い木の椅子ではなく適度なクッションのきいたソファに深々と座って雑誌をながめているうちに、ついうとうとうた寝をしてしまう……このような心地よい空間を病院図書館に求めるのは贅沢すぎるでしょうか。

学会などを目前にして、焦点を絞った情報を手に入れたいときなどは、確実な情報をとにかく早く(できれば安上がり)に手に入れたいと私たちは考えていますから、そのようなときは、きっと図書館員の皆さまをせかしてご迷惑をかけていることと思います。一方、図書館に向いていって、雑誌を手にして居眠っているようなときは、雑誌から情報を探すことよりも息抜きの方が主な目的であることが多いと思いますので、起こさないでそっと放っておいてやってください。

思うに、購読する雑誌を選択する以前の問題として、各病院の医師が病院図書館をどのように利用しようと考えているのかを、まず把握することが肝心なのではないでしょうか？

Ⅲ. 麻酔科の領域と選択すべき専門雑誌

麻酔科学は医学史の中では比較的新しい学問領域です。エーテルを用いた「全身麻酔」がボストンで初めて公開されたのが19世紀の半ばの

ことですから、150年余りの歴史しかありません。歴史的には外科学から分化発展してきた分野ですが、同じ手術室内に外科医と一緒にいても、実際にはむしろ内科的な仕事を担当しています。すなわち、手術中の麻酔管理に際して、患者の合併症や偶発事態への対応・種々の薬剤の投与・モニターを介しての患者の全身管理などが主な仕事の内容です。薬理学・生理学・解剖学などを基礎として発展してきた学問ですが、臨床的には、手術に伴う痛みの治療からペインクリニックへ、術後管理から集中治療医学へ、さらには救急医療・蘇生学などの領域へと麻酔科学の細分化が進んできました。学問の細分化が進むとそれに対応する学会が結成され、専門雑誌も発行されます。こうして、今や麻酔科学という狭い領域だけをとっても膨大な量の情報が蓄積され、沢山の雑誌が発行されるようになってきたわけです。

これら沢山の雑誌の中で、どれがもっとも信頼できるのかは容易に決められないでしょう。ただ、引用される論文がより多く掲載されている雑誌は信頼できるからよく読まれている、という考え方をすれば、やはりImpact Factorがひとつの指標となるかもしれません。表に示したのは、麻酔科関連領域の雑誌についてのIm-

表. 1999年度の麻酔科関連領域の雑誌のImpact Factor

Title	Impact Factor	Cited half-life
Anesthesiology	4.265	7.1
Pain	4.020	7.4
Clin J Pain	2.662	5.8
Anesth Analg	2.509	5.7
Region Anesth	2.412	5.3
Brit J Anaesh	2.387	6.9
Anaesthesia	1.879	7.1
J Clin Monitor	1.400	6.9
Can J Anaesth	1.270	6.5
Paediatr Anaesth	1.206	3.1
Acta Anaesth Scand	1.043	6.6
J Clin Anesth	1.000	4.7
J Neurosurg Anesth	0.934	4.8
Euro J Anaesth	0.849	4.4
J Cardiothor Vasc An	0.811	3.4

(ISI提供CD-ROM 2000年版より)

pact Factor (1999年度) です。これらの上位にある雑誌を置くのが、予算とスペースの限られた病院図書館にとっては無難な選択と言えるかもしれません。この表でImpact Factorが最も高い「Anesthesiology」は、ASA (アメリカ麻酔科学会) の機関誌として発行されていて、名実ともに一番権威のある雑誌と言ってよいでしょう。

しかしながら、たとえばペイン (痛み) の専門家がいない病院やペインクリニックをもたない病院においては、いくらImpact Factorが高くても「Pain」という雑誌はあまり利用されないかもしれません。あるいは事実上小児の麻酔が少ない病院であれば、「Paediatric Anaesthesia」を所蔵しても宝の持ち腐れになってしまうかもしれません。とすれば、数ある雑誌の中から適切な開架雑誌を選択するには、やはり各病院に勤務する麻酔科の医師と協議をして決めていくのが一番妥当な方法と言えるのではないのでしょうか。

IV. くつろいで手に取れる雑誌とは

さて、図書館に向向いて行って、ソファに腰をおろしながら読む雑誌としてはどのような雑誌が適切でしょうか。「JAMA」「New England Journal of Medicine」「The Lancet」などは、専門科のいかんにかかわらず、医師の一般教養として読むことをしばしば勧められている雑誌なので、これらのうちのいくつかはどの病院図書館にも常備してほしいと思います。こうした洋雑誌に相当する和雑誌は、「医学のあゆみ」(医歯薬出版)・「日本臨牀」(日本臨牀社)

あたりでしょうか。

麻酔科領域の和雑誌に、「麻酔 (Masui : The Japanese Journal of Anesthesiology)」(克誠堂出版) という雑誌があります。これは商業雑誌ではありますが、日本麻酔科学会準機関誌になっているので侮れない雑誌なのです。臨床研究と臨床経験を中心とした論文を扱っていますが、すべての論文に英文抄録がつき、MEDLINEにも登録されているので、PubMedでも検索できるようになっているからです。

もうひとつ、ユニークな雑誌を紹介をしておきます。「麻酔を核とした総合誌」と銘打って、1994年に創刊された「LiSA (リサ)」(メディカル・サイエンス・インターナショナル) という雑誌です。この雑誌は麻酔科医以外に外科医・薬学者などを編集委員としてかかえており、麻酔と蘇生・生命維持を中心とした学際的領域をカバーしています。「徹底分析シリーズ」と「症例検討」という二つの連載記事は創刊以来続いており、薬剤や麻酔に関連する医療行為および代表的な疾患について、麻酔科領域を越えた著者が参加して掘り下げた議論を毎回展開しています。また、「気楽な雑誌」というスタンスももっていて、「実践ワイン講座」や「LiSA Aesthetic Salon」などといった肩のこらない連載記事もあって、麻酔科医のみならず他科の医師も(記事によっては一般の方でも)気軽に読める内容構成になっています。病院図書室に置いてほしいもう一冊の雑誌として私が推薦するとすれば、この「LiSA」になるのでしょうか。